

猛獣のツカイカタ

作 池田 怜悧

表紙 藤岡 ると

★注意★

成人指定(十八禁)・BL(ML)小説

過激表現・暴力表現・監禁・調教 SM描写・排泄描写あり。

※地雷等のご苦情は受け付けいたしかねます。

あらかじめ回避ください。

◇工藤 甲斐 (くどう かい)

年齢：25歳 身長：183cm 指定暴力団久住組 (元) 若頭 久住組前組長 四代目 工藤 武志 (むさし) の長男 硬い髪質の黒髪、少し角張った輪郭と鼻から頬にかけて刃傷がある。研ぎ澄まされた目つきは犖猛。恫喝、はったり、度胸は生まれつきのヤクザ者の風格。

◇串崎 一真 (くしざき かずま)

年齢：28歳 身長：178cm UnderBordeaux というボンテージ専門店の店主。裏の顔として調教師、人身売買にも手を染めている。緩いウェーブのかかった黒髪、鼻筋が高く彫りの深い美青年 口調はオネエだが、女装などはしておらず、大抵がスーツ姿。

◇佐倉 虎信 (さくら とらのぶ)

年齢：40歳 身長：188cm 指定暴力団久住組 若頭 工藤が子供の頃からの教育係、兼補佐。久住組の懐刀と呼ばれるほどの武闘派。

◇小西 藤一浪 (こにし とういちろう)

年齢：53歳 身長：178cm

指定暴力団久住組 5代目組長 大柄で体格のいい、威風堂々とした男。人心を手取るのが得意な老獪な人物。

竹の水遣りの音が響く日本庭園を前にした豪華な掛け軸を飾った荘厳な和室に、大木を割るような谷音が響き渡り、空気が堅く凍りついた。

「甲斐、貴様は今日を限り破階だ」

この界隈一体を取り仕切る久住組の組長である小西藤一浪は、目の前に吹っ飛んできたまた若い男へと鈍く光るドスの切っ先を突きつけた。

先日失態をおかしたことを怒めて若頭からの更迭を言い渡した組長に対して、あつことか彼は銃を向けたのだ。

そして、あつけなく彼は近くにいた小西の側近に吹っ飛ばされた重たい空気が流れ、突き出された刃物を前に顔に脂汗を滲ませるのは、鼻先から頬にかけて刀傷のあるギラギラとした目つきの男、元若頭筆頭の工藤甲斐であった。

「おやつさん。まあ親に銃を向けた甲斐さんには問題ありますけどねえ。破階はやりすぎじゃねえすか」

工藤を庇うかのように横から入ってきたのは、組長の片腕で先ほど工藤を吹っ飛ばした張本人であり、飄々とした風情のスーツの男だった。

特段これといった極道らしい特徴はなく、顔も渋みを帯びているが整っている。

おとなしい色のスーツでも着せれば、どこかの課長でも通用しうのだが、醸し出している雰囲気はすべてが、剣呑かつ威圧感を周囲に与えていた。

「佐倉、だが、元はといやあ、おめえの甲斐に対する態度のせいだ。先代の恩義とこっちゃにすぎない」

答めるかのような口調で、間に割って入ってきた目の前の男を睨み付けた。だが、組長も諷められて頭が冷えたのか、先ほどまでのほとぼり様は怒りが表情から消える。

組長として先代には世話になっていた恩義があるのである。簡単にその息子を破階にするのは気が引けていたのもあった。

「確かに、そうですねえ。じゃあ、二本くらいわしが指詰めますんで、どうにか甲斐さんのことは、目えこぼしちゃあくれねえですか」

「あほぬかせ。佐倉に二本も指なぐされちゃあ、戦力がた落ちてるこの話じゃない。損失が組全体の問題になってくらくらあな」

少しだけ余裕ができたのか、豪快にはがはと笑いながらも、小西のドスをもつ指先にはちっとも緩みは見えない。

それを佐倉は見取取りながら、ゆつくりと組長である小西の拳を自分のそれで握りこんで威圧するかのようには顔を覗き込む。その仕

草には組長に対する畏怖もなにもなく、底知れぬ笑みすら表情にたたえていた。

久住組の抜き身の懐力と呼ばれている男であり、この組を大きくした立役者とも言われている。

「だいたいおめえは、甲斐に甘すぎる」

「先代からの預かりモンなんで、オヤジに墓場で泣かれちゃあ目覚めも悪いってもんだ。一度きつちり寝なおすんで、今回のところはわしの預かりにしてやってくたせえ」

深々と頭を下げる佐倉の態度に、組長は苦笑いを浮かべる。

「まったく、わしに意見できるのはおめえだけだ」

組長がぼやきながらドスを引いて懐にしまうのを確認してから、佐倉は顔をあげて肩をそびやかすと、工藤の肩を掴みあげてぐいと自分の肩に担ぎ上げた。

「甲斐さん、いくら腹に据えかねることもあつても、極道の掟には背いちゃなんねえんですよ」

「おろせ。虎公、俺は荷物じゃねえ」

バタバタと肩の上で暴れる男に、佐倉は自分のドスを抜いて首元へ再度押し当てる。

「十分お荷物です。それと、俺はもう甲斐さんの部下じゃねえんで、虎公は却下です」

佐倉はこれ以上この場に留まることは無とばかりに、ドスを引いた遠端に再度暴れたぞうとする男をぐっと押さえ込んだまま、敷居を跨いで外に停めた自分の黒塗りの車へと向かった。